



北越公用記録

東照公造訓

73  
3345  
16



門 3 保 3  
番 3345  
卷 16

東照院現行遺訓書

夏

故校皇山皇氏遺訓之記



一又上意より列下て五月半に城外所へ出立申上りて  
百姓其田を植ふ中に播種て色向き男より  
色々として見えて其の時は種を立以種に  
次は其を差を栽す其中には刀や鋤等を伝  
び林ありり不審は必ひ汝をよりんれを  
家人の追及一人を以て呼け其追及空  
歩して追及逃れ申上りて世に候侍に

手を引あぐ 坊々中侍の侍被孫田  
乃中八子近友侯の侍中八子有孫の手水  
を此のふまへへしとて 顔をおひ大い  
さし我の荷よ出るに時某近友に中八子  
汝のまゝと記不及是事我ふ事  
まゝとて 君心付成りし事知れず  
右候様 燦き業を成る事 是事 是事  
しりやとて 涙を流し 泣き 泣き 涙を流し  
坊々の相成る似合事 ありし事 ありし事

能衣念ふやとまわりの如す ありし事 ありし事  
中人等 亦神に掃き武勇 ありし事 ありし事  
答ふ忠信 深きものなり 或時 以て近友 知れ  
るに増し 大い 孫田 御殿の代友 祈りて 送  
けしとて 孫田 ありし事 ありし事 孫田 ありし事  
とて 孫田 ありし事 ありし事 孫田 ありし事  
若く 孫田 ありし事 ありし事 孫田 ありし事  
内加増 孫田 ありし事 ありし事 孫田 ありし事  
右候 ありし事 ありし事 孫田 ありし事

吾道子美の海甲の梅の正成はては加  
増杯飲は事と只本の分ては正成を  
りや中<sub>正</sub>休あ老良言是非我、言けり如  
何程の細るべき事事を思ひ近友中  
をせり中<sub>正</sub>休あ老良言是非我、言けり如  
中<sub>正</sub>休あ老良言是非我、言けり如  
近友を呼ば子を身ゆき近友中  
如法法念以二ありと程の意外中より  
て吾道、正の海甲の事、正の殿極の正意よ

意中事双あまや、正人ああや  
強回との倉方方、正人ああや  
海甲の事、正の殿極の  
却る海甲の事、正の殿極の  
正意はわ、正の殿極の  
りて海甲の事、正の殿極の  
あに事、正の殿極の  
正意はわ、正の殿極の  
美に正意、正の殿極の

尚家法一古事も成可一有り此家  
大小共に色く程く之の事一其中に一君  
乃即多又此法は其法成若中上府存  
此法は故人より一其法は其序を傳  
其々之を能序と有り如法中上府存  
此法目存又此法を其法と有り其法  
其法は其法海思一思事大方より一  
其法は其法を其法有り其法は其法  
と有り其法一思事より一其法は其法  
其法は其法一思事より一其法は其法

より其法一其法何より一我より中其法  
云け色く其法若中其法は其法より  
其法は其法の外成美其法は其法何  
相法其法は其法其法は其法何  
子細其法は其法其法は其法何  
其法は其法其法は其法其法は其法  
其法は其法其法は其法其法は其法  
其法は其法其法は其法其法は其法  
其法は其法其法は其法其法は其法  
其法は其法其法は其法其法は其法

を蒙るも多し誰か事又事存只今を  
思ふと何事も口を揃て中二件で深奥を  
新島を海を築くて見ればむあんなに  
備れり事通し口揃れりの返事あり  
左馬深奥を手にし〜成敗せしかり  
相強思ふ如しなりし奴子を後又未丈に  
伊は我小栗と雖も坂や同件を云件を  
よ或時海軍の事立二路多坂を色りあへ呼ぶ  
峯に小栗の如の事あり其方を知しとわと

い〜が路多坂努く不存中と云件何事も此目  
件存言上中知れり定る此方にも此尋可成  
そ此奴子見江言上情一我此方二伊を在  
白く不可云少言合相成後我に云くは  
小栗如此の石屋もの事も此路多坂子路  
坂能存れ中一小栗の所罪の事一あふりて  
吟味は程の事多し事〜事〜事〜事  
す事多し事多し事多し事多し事多し  
是を海軍の中分りて別一層を念し小栗子

不取小粟を関のさせたり其後弥四神  
已り前出八世者之已り悪事を悉く  
言上はと只に中上は相小粟憎まじり  
かり即刻即成敗て作伴との法意下は  
慈悲を上のと思ひ色は院言中上は  
関のさせやいひしは我の悪を主人  
よ人のさつしはよりの手立たり  
史記曰事以密成語以泄敗や何り又易  
曰機事不密則害成と言ひ此の時何して

其者此悪事を何のさ上し其  
其者よ之をす為まや是の者身一  
はしむしは其の罪をゆして小  
粟の我よ告たりや其の罪をゆして小  
其者此悪事を何のさ上し其  
者成よより我のれは其の罪をゆして小  
の法人を彼の悪を能知若心よ思ひ  
是を公事ありし中悉く其の罪を  
そ是其の悪事を能知其の事

そふ栗忠茂よて中々も如以成行はれ  
何を病も後事ありやとて 象老も自分  
も才をわふし何事もふ云能彼亦四ふ  
小悪に惹起すやけを共已り悪事を何  
れ所中も謀りし物而已の事をふも  
悪友批判さふ者何れも虚云をふも  
横目付よいそ多ふやり又象老も我を  
高の本を或時我存多耶よと出といふ象  
老共々無用といふ亦甲ふをて然と言たり

弥四ふ我心に陸ていひし故弥四ふ中分  
よりややう愈聖一出たりと彼の切又氏  
ふ事一三言たりしより象老共心よそ  
やうし 弥甲ふ中事一を妙用あや思  
件て次第に小宛を志性心か来右と通り  
に成行あり彼をと友の忠仏師のを少  
おろししとて予の家危きものやたりやとて  
海甲ふが老る悪事なほや切もひ 象老も  
日往者しりた彼者の笑みはとて其はよ



云上也を彼をそ祿次かくをいふそや  
弟に思ひせん事口切〜思唯海  
をよみ討ますふり又そ家老の内閣を  
若ちのそんや思え是又此國のまふひ  
如何やり務めや家に思事あまをを  
何も腕をきく討死はへ〜や思恨  
を極り中〜切や〜り強界金根の子  
長や心合金根をぬすみ天た〜みしを  
横自大弟よ云上ま水大弟首をぬ云上又家

老若にもかくし知れをき〜金根をき  
以向事も此者よ違はる〜知事〜も  
るや〜中〜ぞ何て云〜しや〜りそ  
もや國事を此後者此程の法〜家ま分  
別はて國〜法不美不道〜子よ〜  
手を〜んを〜り何そ跡思〜事の者  
依怙見養す〜や思〜玉天下の政を  
治む〜君のち〜あむ〜意悲を  
政事の根え〜法見〜礼を

忘我職を才一よ〜〜〜我の盛  
衰をたかり吾々竹を正〜〜〜我老の  
苦思を分り正〜〜〜下國家の是非を  
正〜〜〜我若未時より物  
事少も依怙具原可記經〜〜〜心をけ  
得よ我老をかくし何より子孫人よ  
不孝子細き正切よ高り財を正  
金銀未残何如の宝を何〜〜〜誰り  
是をそ〜〜〜いふ〜〜心の荒く帝ハ

いよ〜〜〜土民の辭よ〜〜〜下を由り  
〜〜〜天下の人を非を世以未代とも  
能はるの手に下たり〜〜〜天下礼  
知系加籍は正を切と身り云々〜〜〜人免  
たり〜〜〜人静穏正世あを正倫五  
者正〜〜〜正美、正〜〜〜〜〜〜人免  
取〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
汝等〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
正〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
正〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

上の望むし程を二月の盃の以弟我等  
むうしハ何程あるが今ても何程あり以上は  
家老とて徳人は意外しかたハ重科  
なりと心得よ思て人々か一科の物ぞ良き  
小才やもやう人をあかやうも返しくも  
悪事一の存ぞおたりやしく志信阿茶物を  
何用と上用ひ何程の程なりてても徳人  
むや、思物ぞかく一阿さ、付多、成者  
人々もあかやうあかしく一徳人と徳人

徳人思ひ大將はね何の程にも物なり  
此時や、五物もき物も徳に思存を以たり  
人の家の滅ぶるも主人志きりにさく深  
くせりあか一人は威を飛ひ者の事  
そそ家の運路もかりや、かた

又上意に言ふす保しく一太右左衛門や、後  
徳者なりしをたまふ事家老良の未だ  
法に福くは是のもの傳つよう一か中乃  
徳將に以の外意外し吾本の所望中徳

後復金銀奉役の事延某の如かりて  
家中をけり信人を起さる可し然に仕  
而し予前より予て此中の信人安堵は  
此某もなかりし中予予に成さる可し物信也  
しりお不ぬ名氏予に藤田サリ事云れ信田  
より信建二才の止滅云のみなりし人而しけ拂よ  
逢らる予は惜し事や思ひ早急なり予  
此扱は信也時明く思被を言予大才武  
切ら者そ某一者し一多し一余一たり

惣て主人此念既すあるの悪事一を安老  
武切し侍も様月も主は思建なり云美れ  
りしを強買しめさしつけ已斗知る信何  
船江必信者の案りに何しを如手云云して  
終に身をもたひたり能致心信よかりそ  
めにも人をうりけ思ひ信本む天下能  
信去者未こま江りも信の事しき予云して  
天下の人は笑是れ信軍信者よく信す  
なえ素人には良知と云物互て善悪

邪心で大方を知らぬ物を死に候ふ事  
は中たふさぬものなり心はよき義  
も何程に善事をいふても心に悪何れも  
悪や知り言ふに隠り候ふ事  
心悪やけ悪き善や知り知る事も候り  
わさし事候れば昔を以て今を和らみよ  
主人侍法事候も其家を候り事候  
其の居たる者の名つゝ事候す主の事  
を乞ふ事候ふい物事候ふ事候者必欲

ふかく悪者利口のこつけ者  
徳契を以て自ら人のこわす事候  
の事候は己の威勢を存人よこやまわ  
せんる事候なりて人を何か  
やこり狐の虎の威をこふ事候  
はまに居て人をあかし已や中の上  
ふひ難者の一寸先を知らぬ事候  
起る事思ひて一人の面をまかし  
立末は事候法候人をあし已は

智恵何の役にも成らず  
不是也事一可なり  
君は忠なり小人なり  
吾心に見えをせよ  
無きも皆己の才  
より此もぞ忠信と  
し人相を去又己の  
知正は皆愚を弄ひ  
自是也老の士を  
不是也事一可なり  
君は忠なり小人なり  
吾心に見えをせよ  
無きも皆己の才  
より此もぞ忠信と  
し人相を去又己の  
知正は皆愚を弄ひ  
自是也老の士を

ありては  
下のいふ  
むあを  
なり是を  
小才未  
人救う  
亦在ふ  
費し  
志少

百姓を地味も愛す者このは至りに  
は規より汝も加はるる昔人のころも如く  
悪人佞人結事をほらふとてふとて  
中家。才一の忠臣こゝを世を孔子の祠も民  
不患人の不己知患不知人なりと云り人  
を知らず智あるなり人を志らんを世を  
我心の依怙具原の如を去て人の心原  
結善悪を能くすべし云々如と形方よ  
おろろ高きしひ又古語曰人を以言義

心見金を以火心見の如しと云り伐を去るを  
又言善を以心やを去るし口を去る名言をや  
あく心をひらみよの者有り能く辨ひ  
知るし

一  
物言政をよ法と言物有り法や大工  
曲尺のこやししたへを以るるの長六尺横  
三尺と定たりのこをし来たりとも川くし  
乃ち事有判りて者やも徇る金有り  
是を曲尺の字をなすも法といふるや

政道を以てし又息ある大将を阿  
運とたつたつては運是又運はつたつて古法  
を以て其の法を破る古法を破り新法  
立利口たてある心根をうつつたつて和  
初と惡源を去る已の事をたつたつてあ  
たる事そ是を曲尺の細工はあつた  
初と縦を以て其の曲尺を定つたつて曲尺  
を以てし只我細工に拘つたつて其の表は  
堅直大横買ありつたつて其の事

仕法を以てし一長を尺横を尺の換を以てし  
云つたつてしそ是を以て何玉の法を以てし  
間と何とたつたつて其の如く物も曲尺も其の  
政道と其の色を以てし新法新法  
を以てし其の法を以てし天有る有るを以てし  
細工其の法を以てし天有る有るを以てし  
法を以てし其の法を以てし天有る有るを以てし  
後来のあるるの法を以てし其の法を以てし  
初と別政道とを以てし其の法を以てし



我意を立彼欲心源を理窟者に知る  
のこれ先祖をけしきりあきあやく大を  
控へ置けりつゝみりた極までぐや  
返く新法を立へりてひつてきりて先祖の  
苦勞を以て國郡を相續する大恩を知  
て善法を考り後人をきりつけ親よ治  
て天下の忠信傳ふ人そ何程上むきを  
のけりりあきもあやうきや色民を  
むのりて大悪人を能く念を入善言を

善言を知りまけて念根を集積人をく  
しめつとあきもき福の元念根を施して  
人を集めて是れ長久の元念根を草  
木の根を人の和ら花實を根を能養へ  
花も実も年々あきりて是を考て慈  
悲を根えと定りあり

一  
又上意より天下治り法を貴四村の二ツ々貴  
き法を貴するは善を貴す水を貴人  
を、海は貴す悪を二下しむる一思を

四封を平れ天下の悪人をこりぬる牙  
一衣若志を太小とせし一五ひしきより  
外の法を無ぞとせし一河津も  
承ふし一為て政道を前し中し  
一つ世を毒虫とせし一己を法とせし一各を  
いし一夫・其徳しめを刻刻切て捨て  
其切口下を愈々牙と無恙そ是を不切  
し一毒時を其口の毒後より物心牙に  
已しり一死を以てし一毒志を味し

字をひきぬ是又是をすし一立をりし  
天下を治す其徳ゆかし一志を國天下の  
礼の甚そ海甲し一志を志の志志志志  
の志志志はやくは世間ハ八ん志志志  
己の志を却て志志志志志志志志志  
待て中し徳の志志志志志志志志志  
海甲し志の志志志志志志志志志志  
志志志志志志志志志志志志志志志  
不禮何れ又志志志志志志志志志志

唯志何色を根立義子をわすれずより  
大才小才其心中に一念を極む思ひ  
若才粹滅亡し妻子けむそくして迷成  
此百年を顧み暗涙を流し彼又誰  
相恨む能人をも恨ものぞ是偏より  
人思成あり如以成を必つてを亡く終  
そは才をそふ物そわく其の考あり  
得るそもおふも悉皆わりのりも者も  
汝等の忠信と云ふ徳人の心易く出入し

其内美程をかり正成志を道并政を  
是非善悪我才能思事と仰りくよ深  
而や汝等おそ徳人ウややふ而能を何  
程言中上と仰り共徳人よ素より秀  
忠徳徳人を徳人うわやうまきき  
高位を好む元来より高きり是を  
引下げて根のを深く老よ根を深  
くするは下段の志よ仰り今よ深  
を不才のあつ深若にあり大河

や成が就中汝も慈悲深く考へて  
思へし心は有る程自分善  
ぬと思ふ天下の徳人悪成と云時  
秀忠此国の恥を承けしや  
権を以て徳人の批判  
よしとめしので彼初も心よ  
てたれを  
公をよ先頭仰り奉る事あり  
汝もか  
仰りて天下の恥を承けしや  
成が  
古哥よ

や事若様と人よ  
心持といひし  
彼跡思ふめより  
方乃徳士の美を  
度来りて  
志有りて  
善のりや  
おやりのよし  
一

又上意は彼の跡思ふよりして我成とのふ

云々及徳大者も哀強き人又亦来能去を  
一人の威を以て世々々々者強き怪儒者を愛  
す別人を嫌ひけり子細を以て人々を天下  
啓初は本あり以故にわくし同舟を言舟  
象老の上の善悪を以て少出りて象老す  
あふあまきと天下を為すはかたむしむあ  
くとも以て光怪ありし相象老の上わくし  
同舟を以て取成侍を撰て用よ天下の隠  
同舟を以て是非の政をなす大事の心故あり

依波雅樂不能と少け危角子前明にして  
天下の善悪を以て象老共吟味し象老は  
善悪を將軍自吟味せりりゆ後也  
又主人の善悪を以て象老共吟味し諫言を  
中と定りしと少けありあまき我強甲とよ  
気をはげしめし時分を以て清康公廣忠  
公の代に象老功の者共も心極に思ひあり  
ありし口をつと三つを以てねたし馬を  
惣る主人者り強き威を以て上故より悪人

も愛すの時を一行を老を始と主権元入  
事斗りを後侍も才加すくして能き  
押込し建或を才を引出て以て徳人  
と心懸ゆる古遠し彼源信者も同子ひて  
時を始て必し衆亡者ぞ彼強四ふめあり  
て子供のよを始り尤も老の事は日く夜よ  
少すあり又も老は善悪も徳も徳  
後士誇り一見を衆老共も告老と云ふ  
誠の道なり此共汝皆もよよかす人

徳人何事も云ぬ者ぞ徳人よ者として  
見を少け將軍の才の上を此女も才よ  
進退軍の才よ冬冬人よ及のありやも  
悪事の才よ此才の才よ少少理よ世も月分  
何れなりあ能あり少少推よあり此尤  
何れ云たありや元を正しく處り人  
心懸ゆる悪事を改し修初の事共  
此よあり入事とも同いふ事も推よ  
大に望の詞よ天下の目を以て天下の身を

以て身て天下の心を以て慮建といひり  
又大學子よ十子の心ひしす所十国の見所  
と語り実よ尤の事あり主人をたふか  
し傍衆をたふさる世あるもあふその法  
人さたるふこのれぬ者ゆへ世上の若衆  
を急あへて言ひて常々世上の批判時法を  
やの奇とよ心持政道をあすふしされを  
信長六月二十一日の通ひふ京産ま五月  
にちてゆは法をいふあり明智あるを申す

及身も志せざるも私にけぬあをえ  
よの心をひたさるり此れあり云々事ある天  
道なりこの一をいふるや急運々急こつ  
けまき悪事をゆる己の心よくて人を  
知るまきや思ひ人を何あはるぞ  
汝等能く心持之あり世事の事細二  
ゆり宿る者あが陰ををやゆつたあはれ  
古汝の身よの事よ未と知運む何はれ  
不事事を言わしたり若むささけ法をいふ

苦えを正すべし子細て其者の云よ  
何れに大なる善あり天をよか人習の悪  
を改むせんやして善しむ世のあやむ思ひ  
心腹よ忍むそい申しめよたどひも我子ニ  
悪事何運を父兄を打擲し改めよ善  
しむるべし

一  
才一を教法を能く久し教法を云ふは  
武家農工商各業の不作又休て作  
法正一を教法といふは内より善

法何れ見を能く久し其事を云ふ法を智  
り解すたれし新法より能く事ありとも  
古法を改む不又休て多しハ使ひ出来  
り物を惣て武家より武家何れ能く就  
若未の代よ或時其家儀を云ふ米の程を  
不知物を物の本のたより運を少くん運をた  
や所を賢のありし我智意を云ふ情をた  
大月義隆ありとも米の程を云ふしして  
三皇五帝も其事の如く心法武家の右



一 利尽果敢立ひ永失ふあり  
用未の用不用の用時用は用とて二分の  
用有り先ん用未の用ハ二我敢然姓を  
源氏と新田徳川松平家臣を向大平水  
野と酒井お部お友井伊柳平本内友  
名井古保中田石川お井おおお山お部  
以外流くの氏有り此氏の子孫親より  
生るよりおあまのよま及親よおあまひ  
其用を初むあを同未の用とて又其

子親下も孫の外おをりお部とてお子  
家をちあをふ用の用おいおおハお子  
おつつけお何お用よまおとておお  
の外よ求事あて信者た功あ能時を  
君をたといより又其かしおおまお者  
の子よ能者生ておおおおの用を  
おおておおをま(一)おおおお  
能まおおおておおおおおおお  
おおおおおおおおおおおお

立事も立事家志を汝等以外我輩は  
傳者其子の賢者を思ふ知りし能事  
をりりて亦よるし能事兼を指して  
志を老人の志を能人を指す外別  
兼事その用能事あり能事兼を立事  
そ相能事その用兼事の内は其能事  
あり能事能事能事能事能事能事  
つし能事能事能事能事能事能事  
を言そ其能事能事能事能事能事

ひつるも其志を我知る能事能事能事  
に見し能事能事能事能事能事能事  
中事よめつりて能事能事能事能事  
能事能事能事能事能事能事能事  
能事能事能事能事能事能事能事  
我志を能事能事能事能事能事能事  
能事能事能事能事能事能事能事  
能事能事能事能事能事能事能事  
能事能事能事能事能事能事能事  
能事能事能事能事能事能事能事  
能事能事能事能事能事能事能事

雅樂の仁大炊の智伯者の勇以て一極を志し  
是を以て扶くくを竹子代を將軍たる人  
そ惣して子供と伴ふ老共々人を吟味  
く我牙付前々を体よし縦の目も竹  
子代は汝等附く共心は事あり物  
事を秀た<sup>い</sup>たて<sup>い</sup>る思ふべし  
惣て人よ大根より先づ慈悲を美の本  
定むるし無是非なる事一仰り可し  
事互しく其陸分諺言をせよ其外の事ん

く生を存す<sup>い</sup>る智り<sup>い</sup>は子不<sup>い</sup>は子<sup>い</sup>は  
ふ中より互る上戸下戸を分別せよわく  
我生を存す<sup>い</sup>るい<sup>い</sup>や<sup>い</sup>ん<sup>い</sup>書<sup>い</sup>る<sup>い</sup>事<sup>い</sup>物<sup>い</sup>を<sup>い</sup>知<sup>い</sup>り<sup>い</sup>難  
そ<sup>い</sup>た<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>る<sup>い</sup>子<sup>い</sup>の<sup>い</sup>ま<sup>い</sup>り<sup>い</sup>る<sup>い</sup>事<sup>い</sup>を<sup>い</sup>我<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>る<sup>い</sup>  
た<sup>い</sup>る<sup>い</sup>事<sup>い</sup>頻<sup>い</sup>は<sup>い</sup>れ<sup>い</sup>る<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>る<sup>い</sup>い<sup>い</sup>も<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>る<sup>い</sup>ぬ<sup>い</sup>物<sup>い</sup>を  
只<sup>い</sup>に<sup>い</sup>右<sup>い</sup>根<sup>い</sup>を<sup>い</sup>行<sup>い</sup>美<sup>い</sup>し<sup>い</sup>餘<sup>い</sup>り<sup>い</sup>右<sup>い</sup>事<sup>い</sup>を<sup>い</sup>  
事<sup>い</sup>を<sup>い</sup>方<sup>い</sup>方<sup>い</sup>り<sup>い</sup>る<sup>い</sup>か<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>し<sup>い</sup>虚<sup>い</sup>の<sup>い</sup>可<sup>い</sup>よ  
心<sup>い</sup>よ<sup>い</sup>我<sup>い</sup>南<sup>い</sup>か<sup>い</sup>る<sup>い</sup>ぬ<sup>い</sup>世<sup>い</sup>の<sup>い</sup>中<sup>い</sup>り  
人<sup>い</sup>の<sup>い</sup>そ<sup>い</sup>む<sup>い</sup>く<sup>い</sup>ハ<sup>い</sup>カ<sup>い</sup>カ<sup>い</sup>カ<sup>い</sup>カ<sup>い</sup>カ<sup>い</sup>カ<sup>い</sup>カ<sup>い</sup>

我心おもてよ此家物あふき

いひよまきこの見よくかかぬし

やよめむのこをよきあまやて

所笑は成返すくく竹ふ代方をき雅樂

大炊御老三人と任老と通つれよ水を我

畏城のこふよ休ぬ水を大炊のき清くくはる

共の非をよけ修を告げ見を告げ御老共をよ

高んはけく後ろそ已運家老やあり上江

見ぬるの振舞をあきんとおひび又種

成三ふ若き者あまきりて我歌を奪来ん

や謀ぬ運兵人永本不あふひ微妙の運の

心見をよよりて後よき強甲めお徳人ま

び已の悪を廣大よ成より内この急お遠し

是非なり勝頼の内通きく大將多日志者要

よふ少知事と徳人の判札ぞ子細を徳人

能承解身大小阿運兵志信は智りあ化御を

徳人の物を云せ能事をゆ用口の能智者ぞ

は其上人威をりりり徳人伏しうむ臣



